第四講　空欄補充

問1　次の文章を読んで、空欄［X］［Y］に入る言葉として最も適当なものを、後の中からそれぞれ選べ。

薬玉に解きかへてぞ捨つ［X］。

注　薬玉…薬や香料を入れた袋を造花や糸で飾ったもの。邪気を払い、不浄を避けるものとして柱や簾にかけた。

あはれ此西瓜の赤くてあれかしと思ふこそ、さしあたりての願ひ［Y］といふ。

［X］
ア　めり　　イ　める　　ウ　たり
エ　たる　　オ　たれ

［Y］
ア　なり　　イ　なる　　ウ　なれ
エ　なし　　オ　なき

問２　次の文章は、石上の中納言が燕（つばめ）の子安貝を取ろうと計画している場面である。この文章を読んで、後の問いに答えよ。

中納言石上麿足（いそのかみのまろたり）の、家に使はるる男どものもとに、「燕の、巣くひ［　X　］ば告げよ」とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらむ」と申す。答へてのたまふやう、「燕の持たる子安貝を取らむ料なり」とのたまふ。

問　空欄［　X　］には助動詞「たり」の活用語が入る。最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　たら　　イ　たり　　ウ　たる　　エ　たれ

問３　次の空欄［　A　］に入る最も適切な漢字一字を記せ。

栗といふ文字は西の木と書きて、西方［　A　］土に便りありと、行基菩薩の一生杖にも柱にもこの木を用ゐ給ふとかや。

問４　次の文章を読んで、空欄［A］・［B］に入る語の組み合わせとして、前後の文脈から考えて最も適切なものを、後の中から選べ。

*はし舟とつけて、いみじう小さきに乗りて漕ぎありく。つとめてなど、いとあはれなり。あとの白波は、まことにこそ消えもていけ。よろしき人は、なほ乗りてありくまじき事とこそおぼゆれ。徒歩路（かちぢ）もまたおそろしかなれど、それはいかにもいかにも地につきたれば、いと［A］。
海はなほいと［B］と思ふに、まいて、海女（あま）のかづきしに入るはうきわざなり。腰につきたる緒（を）の、絶えもしなば、いかにせんとならん。

*はし舟…はしけ舟。陸と停泊中の本船との間を往復して、貨物や旅客を運ぶのに用いる小舟。

ア　A　やすし　　B　はやし
イ　A　ゆゆし　　B　たのもし
ウ　A　はやし　　B　おそし
エ　A　たのもし　B　ゆゆし
オ　A　おそし　　B　はやし

問5　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

都ならねども、年の暮れには、我も我もとその急ぎするも、あはれにおぼえて、

　常よりも心細く［A］おぼえける旅の空にて年の暮るれば

　憂き身［B］厭ひながらもあはれなれ月を眺めて年の暮れぬる

年立ち返りければ、深山辺（みやまべ）の霞もともに思ひ立ち、都の方へゆくほどに、ある野中に、青柳（あおやぎ）のいとおもしろきを植ゑまはし、軒端には小暗きほどに梅を植ゑ並べたるが、花咲き乱れたりければ、人々とどめねど、ゆきもやられぬ匂ひゆかしさに、この伏屋（ふせや）にとどまりけり。

　一人寝（ぬ）る草の枕の移り香は垣根の［C］の匂ひなりけり

　(注)山賤（やまがつ）の片岡かけて占むる野の境に立てる玉の小［D］

注　山賤――山里に住んでいる身分の低い者。

問一　［A］・［B］にあてはまる係助詞を記せ。

A＝　　　B＝

問二　［C］・［D］にあてはまる最も適当な漢字一字を文中からさがし、答えよ。

C＝　　　D＝

問6　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

俊云、前の歌〔＝波寄する海士(あま)の苫(とま)屋の隙(ひま)をあらみ漏るにてぞ知る夜半(よは)の時雨は〕は、時雨すげなき様に聞こゆ。時雨は起きゐて、聞き明かすべき事ならねど、これは漏るに、初めて知るといへば、［Ⅰ］、漏りて衣の濡れければ、起き騒ぐと見ゆ。もし漏らざら［Ⅱ］ば、又の日、人づてにてこそ聞かましと、おぼつかなくぞ聞こゆる。

注　俊云…平安後期の歌人・源俊頼の言うことには。
　　海士の苫屋…茅などを編んだもので屋根をふいたり周囲をかこったりした粗末な漁夫の家。

問一　空欄［Ⅰ］に入る言葉の意味として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　寝入っていたところ
イ　波の音を聞いていたところ
ウ　時雨の音を聞いていたところ
エ　目を覚ましかけていたところ

問二　空欄［Ⅱ］に入る助動詞を適切な活用形にして三文字で記せ。

問7　次の文章を読んで、空欄 A に入る言葉として、最も適切なものを後の中から選べ。

豊の明かりの節会の夜、さえかへりたる有明に（通宗中将が）まゐられたりしけしき、優なりしを、ほどなくはかなくなられにしあはれさ、あへなくて、その夜の有明、雲のけしきまで、形見なるよし、人々つねに申し出づるに、

露ときえ煙ともなる人はなほ A あとをながめもすらむ

思ひいづることのみぞただためしなきなべて A ことを聞くにも

ア　うれしき　　イ　やましき
ウ　こちたき　　エ　はかなき

問8　次の文章を読んで、空欄 A に入る語として、最も適切なものを後の中から選べ。

星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつつ、木の葉にかかる音のをかしきを、「なかなかに艶(えん)にをかしき夜かな。月のくまなく明(あか)からむも A まばゆかりぬべかりけり」。

ア　をかしく　　イ　さやかに　　ウ　あはれに
エ　はしたなく　　オ　つきづきしく

問９　次の文章は幕末期福岡の歌人大隈言道の歌話の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

己(おの)が家せまくいやしきは言ふもさらなれど、山野およそ十里あまりの眺望ありて、〈中略〉よく見え、橋も四つ五つ、行く人なども見え、月に［ a ］雪に［ b ］ば、随分の美観なるを、［ c ］ともあしとも言はずして帰る人あり。また折々訪ふ人とても、日々のさまは見まほしかるべきを、障子をだに開けずして帰るあり。

［ Ⅰ ］はさもあるべし。詩歌のことなどを飽くばかり語らひて、風景を見ずして帰るはいかにぞや。〈中略〉

古今集に

　女郎花吹き過ぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

これは女郎花の香(か)をかぎ知れるなり。すべて梅の香は言ふもさらにて、藤の花、菊の花、いづれも異なる香のするを、［ Ⅱ ］はよくかぎ知りてぞありけん。これも花を賞(め)づるよりのことなり。この歌、終句「しるけれ」と詠める、ただ香(かを)りのするのみならんや。女郎花の香ときき知れれば「しるけれ」と言へるなり。［ Ⅲ ］とはいたくかはりあることを知るべし。

問一　空欄［ a ］～［ c ］には同じ形容詞が入る。活用形を考慮して空欄を埋めよ。

a＝　　　　b＝　　　　c＝

問二　空欄［ Ⅰ ］～［ Ⅲ ］に入る適当な語を次から一回ずつ選べ。

ア　今の人　　イ　昔人　　ウ　俗人

Ⅰ＝　　　　Ⅱ＝　　　　Ⅲ＝

【第四講】

〔解答〕

問1　X イ　Y ウ　問2 ア　問3 浄　問4 エ
問5　問一 A ぞ　B こそ　問二 C 梅　D 柳
問6　問一 ア　問二 ましか
問7　エ　問8 エ
問9　問一 a よく　b よけれ　c よし
　問二 Ⅰ ウ　Ⅱ イ　Ⅲ ア

〔現代語訳〕

問1　薬玉に取り換えて捨てるようだ。
ああ、この西瓜が赤くあってくれよと思うことが、当面の願いであるという。

問2　中納言石上麿足が、家に使われる男たちのもとに、「燕が、巣を作ったならば知らせよ」とおっしゃるので、承って、「何のためであろうか」と申し上げる。答えておっしゃるには、「燕が持っている子安貝を取ろうとするためだ」とおっしゃる。

問3　栗という文字は西の木と書いて、西方浄土に関係があると、行基菩薩が一生杖にも柱にもこの木を使いなさるとかいうことだ。

問4　はしけ舟と名付けて、とても小さい舟に乗って漕ぎ回る。早朝など、とても趣深い。跡の白波は、（古歌にあるように）本当に次々と消えていく。ある程度の身分の人は、やはり（舟に）乗って出歩くべきではないと思われる。徒歩の旅路もまた恐ろしいようだが、それはどう言おうが地についているので、とても頼りになる。
海はやはりとても不気味に思うのに、まして、海女が潜りに入るのはつらい仕事である。腰についている紐が、切れて

しまったならば、どうしようというのだろう。

問5　都ではないが、年の暮れには、我も我もとその〔＝正月を迎える〕準備をするのも、しみじみと思われて、

常よりも…＝いつもよりも心細く思われるなあ。旅先で年が暮れるので。

憂き身こそ…＝つらい我が身は嫌々ながらもしみじみと思われる。月を見て物思いにふけりながら年が暮れてしまうなあ。

年も改まったので、深山の霞も発生し、それと一緒に思い立ち、都の方へ行くときに、ある野原の中に、青柳でとても趣のある柳を周りに植えて、軒端には薄暗い感じに梅を並べて植えているのが、花が咲き乱れていたので、人々が引き留めないけれど、通り過ぎることができないほどの香りの慕わしさに、このみすぼらしい家に泊まった。

一人寝る…＝一人で旅寝をする移り香は、垣根の梅の香りであるのだなあ。

山賤の…＝山里に住んでいる身分の低い者が、片方が丘になった一帯を自分のものとする野原の境界に立っている美しい柳よ。

問6　源俊頼の言うことには、前の歌〔＝波が寄せる粗末な漁夫の家の隙間が荒いので、漏れることで知る、夜中の時雨は〕は、時雨に愛情がないように聞こえる。時雨は起きていて、朝まで聞くほどのものではないが、この歌は漏れるので、初めて知るというので、寝入っていたところ、漏れて服が濡れたので、起きて騒いだと思われる。もし漏れなかったならば、次の日、人づてに聞いたのだろうと、頼りがないものに聞こえる。

問7　豊の明かりの節会の夜、冴えわたっている夜明け方に（通宗中将が）参内なさった様子は、優雅だったが、まもなく亡くなりなさった悲しさは、どうしようもなくて、その夜の明け方、雲の様子まで、形見であることを、人々がいつも申し出るにつけて、

露ときえ…＝露のように消えてなくなり煙ともなる人は、それでもやはりはかなくなった跡の空を眺めもしているだろう

問8　星の光さえ見えず暗いときに、時雨が降っては、木の葉にかかる音が趣があるのを、「かえって優美で趣のある夜だなあ。

思ひいづる…＝思い出すことばかりがただ前例がないくらいだ。並一通りのはかないことを聞くにつけても。

問９

月が曇りなく明るいようなのも、体裁が悪く恥ずかしいに違いないことよ」（という）。

私の家が狭くてみすぼらしいのは言うまでもないが、山野およそ十里あまりの眺望があって、〈中略〉よく見え、橋も四つ五つ、行く人なども見え、月見によく雪景色もよいので、たいそうな美観であるが、良いとも悪いとも言わないで帰る人がいる。また折々に訪問する人でも、日々の様子は見たいはずなのに、障子をさえ開けずに帰る人がいる。俗人はそれでもよいだろう。詩歌のことなどを飽きるほど語り続けて、風景を見ないで帰るのはどういうことだ。〈中略〉

古今集に

女郎花…＝女郎花を吹いて過ぎてくる秋風は目には見えないけれど香りでわかる

これは女郎花の香りを嗅いで知っていたのだ。すべて梅の香りは言うまでもなく、藤の花、菊の花、どれも違う香りがするのを、昔の人はよく嗅ぎ分けていたのであろう。これも花を愛でる心からくることだ。この歌は、終句で「しるけれ」と詠んでいるが、ただ香りがするということだけであろうか。女郎花の香りであると嗅いで知っていたので「しるけれ」と言ったのだ。今の人とはとても違いがあることをわきまえなければいけない。